

琉球大学学術リポジトリ

大学生の社会・文化的認知と社会的適応との関係に関する研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2008-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): social-cultural cognition, social identity, self-esteem, social adjustment 作成者: 中村, 完, 玉木, 和歌子, Nakamura, Tamotsu, Tamaki, Wakako メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2839

大学生の社会・文化的認知と社会的適応との 関係に関する研究

中村 完 玉木 和歌子*

A Study on the Relationship between Social-Cultural Cognition and Social Adjustment of College Students

Tamotsu NAKAMURA Wakako TAMAKI

Abstract

The study is mainly aimed to reveal the relation among social-cultural cognition, self-esteem, and social adjustment of college students. Measuring methods for social-cultural cognition, self-esteem, and social adjustment were examined on the college students from Okinawa and outside of Okinawa. Based on the results of these measuring methods, the following findings were obtained. 1) Students from Okinawa have more positive social-cultural cognition on their home prefecture than the students from outside of Okinawa. Regarding self-esteem, however, no significant difference was recognized between the two groups. As for social adjustment, it was indirectly suggested that the students from Okinawa carry out more favorable social adjustment than the students from outside of Okinawa. 2) Based on the social identity theory, the hypothesis that college students with more positive social-cultural cognition on their home prefecture categorized by themselves have higher self-esteem and more favorable social adjustment was examined to be generally proved.

*琉球大学非常勤講師

Key words: social-cultural cognition, social identity, self-esteem, social adjustment

I はじめに

人間は、いろいろな水準で構成されている諸文化の中に生まれ、これら諸文化との相互作用を通して成長発達していく。

ところで、文化 (culture) とはどのように定義づけられているのだろうか。通常、代表的な文化の定義として、人類学者のタイラー (Tylor, E. B.) やリントン (Linton, R.) によるものが挙げられる (石川, 1978; 江淵, 1979)。しかしながら、ここではクラックホーン (Kluckhohn, C.) やオスグッド (Osgood, C. E.) による定義によって文化の内容を理解することが有効であろう。クラックホーンの文献によると、文化には顕在文化 (explicit culture) と潜在文化 (implicit culture) とがあると述べられている (星野, 1979)。すなわち、顕在文化とは、衣食住や生産に関する物質文化や作法・技術、宗教儀礼、社交、会話、芸能、レクリエーションなどの行動を含んだ直接眼に見えるものであり、それに対して潜在文化とは、顕在文化の背後、ないし基礎にあたるルールや価値観、思想、観念体系などと言われている。一方、オスグッドは客体文化 (objective culture) と主体文化 (subjective culture) という文化の新しい区分の仕方を提起している (田中, 1986)。客体文化とは、人間によってつくられて外側に存在する文化である。これには、人間がつくりあげたさまざまな工芸品や造作物とそれらをつくり出す諸技術、そして観察可能な人間活動 (たとえば、行動規範、对人的役割、育児の方法、社会的・法的規制など) が含まれる。他方、主体文化は、客体文化を創造し生産する人間の各種の心理的過程 (たとえば、知覚、認知、感情、価値観など) からなっている。

以上のような文化の定義から示唆されることは、文化という意味内容には、当該社会の成員によって機能される認知的側面、行動的側面、そして

これら2つの側面の働きの結果もたらされる物質的所産の側面、という3つの側面が含まれているということである。ところで、NHK放送世論調査所（1979）の「日本人の県民性－NHK全国県民意識調査－」や、NHK放送文化研究所（1997）の「現代の県民気質－全国県民意識調査－」によると、各県（地域）によって差異のある特徴的な文化内容が存在しており、県民意識や郷土意識が異なることが示されている。さて、大学生は自分の出身県に関して、どのような社会・文化的認知を抱いているのだろうか。

ところで、社会心理学の領域において、自己によってカテゴリー化された集団、社会、地域についての認知に関する理論について、社会的アイデンティティ理論（social identity theory）がある（Tajfel, H., 1982; Hogg, M.A. & Abrams, D., 1988; Hogg, M.A., 1992; Deaux, K., 1996）。この理論によると、人々は同時にいくつかの社会（集団）的カテゴリーに所属しているが、各人は時間的、空間的状況に応じて最適なカテゴリー、つまり最も有用な枠組みを使用すると言われる。そして、この理論によると、社会的アイデンティティとは、自己カテゴリー化によって自分の所属する社会（集団）的カテゴリー（たとえば、国民、民族、宗教、職業、階級、性など）の信念、規範、価値観、態度、情緒などを内在化し、それと一致するように自己概念を形成し自己定義することである。この社会的アイデンティティによって、われわれは誰であるかについて比較的一致した意味を得ることができ、社会的関係性の複雑なネットワークの中で、われわれの位置を決定し得ると言われる。また、社会的アイデンティティは、社会的カテゴリーと個人の行動を媒介する機能を持つのである。また、一般には自分がそのメンバーであると認知しているカテゴリー化された集団のことを内集団とよび、それ以外の所属意識のない集団を外集団とよんでいる。社会的アイデンティティ理論によると、自己カテゴリー化した内集団と外集団を意識化させると社会的比較の心理メカニズムが発生すると考えられている（Turner, J. C., 1987）。そして人々は内集団と外集団を差異化することによって、自らの内集団への偏好が生じ、外集団と比較して相対的に肯定的な社会的アイデンティティを獲得する。すなわち、こ

の選択的区別が相対的に肯定的な自己評価を獲得させ、個人の自己価値や自尊感情を高める働きをすると解されている。

また、Hogg (1992) によると、社会的アイデンティティを測定する指標として、①集団プロトタイプの知覚、②規範的行動、③自集団中心主義、④内集団びいき主義、⑤集団間の弁別、⑥内集団好意を挙げている。上述の社会的アイデンティティの定義における内在化の内容やこの測定指標の内容は、クラックホーンやオスグッドによる文化の内容と類似するものであると考えられる。換言すれば、社会的アイデンティティの内容は、自己カテゴリー化した集団や社会に関する社会・文化的認知で構成されていると理解できる。

ところで、一般的には自己評価や自尊感情の高い者は、低い者に比べ心理的・社会的適応が好ましいと指摘されている(磯崎, 1994; 片山, 1996; 菅沼, 1997)。

そこで、本研究では次の2つの課題について検討することを目的とする。

- 1) 沖縄県出身学生と沖縄県外出身学生との間において、各出身県に関する社会・文化的認知や彼等の自尊感情及び社会的適応がどのようになっているかを比較検討する。
- 2) 大学生が自己カテゴリー化した自分の出身県に関する社会・文化的認知がより肯定的である者ほど、自尊感情がより高く、また自尊感情がより高い者は社会的適応がより良好であろうという仮説を検証する。

II 方法

1. 調査対象者

調査対象者の内訳は表1に示すとおりである。沖縄県内出身学生は185人(男子; 105人, 女子; 80人)であり、県外出身学生は96人(男子; 60人, 女子; 36人)である。対象者の合計は281人である。

表1. 調査対象者の内訳（人数）

		男子	女子	合計
沖縄県内出身学生	琉大生	96	51	147
	冲国大生	9	29	38
沖縄県外出身学生	琉大生	58	34	92
	冲国大生	2	2	4
合 計		165	116	281

2. 測定尺度

本研究では以下のような尺度が使用された。

1) 社会・文化的認知測定尺度

この尺度は、Hogg（1992）の測定指標を考慮にして中村・田中（1994）によって作成されたものである。本尺度は、11設問項目－3因子で構成されている。なお、本尺度の信頼性及び妥当性は検証されている。第Ⅰ因子（5項目）は『伝統的文化志向』と命名されている。この因子に含まれる設問項目の内容として、次のようなものがある。すなわち、「あなたの出身県には、伝統的な民謡・舞踊など郷土芸能があると思いますか」、「あなたの出身県には、高齢者を尊重する傾向があると思いますか」、「あなたの出身県には、祖先を崇拝する傾向があると思いますか」、「あなたの出身県の郷土料理は長寿に効果的だと思いますか」、「あなたの出身県の人々は平和愛好者が多いと思いますか」である。第Ⅱ因子（3項目）は『地域的互惠』と命名されている。この因子に含まれる設問項目の内容として、「あなたの出身県では、困った人がいる場合に、隣近所の人々や親戚の者が援助するほうですか」、「あなたの出身県では、青年会や自治会の行事が盛んであると思いますか」、「あなたの出身県の人々は、互いに協力しあっていると思いますか」がある。第Ⅲ因子（3項目）は『地域的愛着』と命名されている。そして、この因子に含まれる設問項目の内容として、「あなたは自分の出身県が好きですか」、「あなたは自分の出身県

の自然的・地理的環境についてどう思いますか」、「あなたは自分の出身県の方言についてどう思いますか」がある。これら各尺度において「あなたの出身県…」、「自分の出身県…」などの表現法を使用して、出身県を自己カテゴリー化による内集団として意識化するように工夫している。これら11設問項目に対して、「非常に～だと思う」（5点）から「全く～だと思わない」（1点）までの5段階で評定させた。この得点が高いことは、大学生が自分の出身県の社会や文化に対して、より肯定的に認知していることを示す。

2) 自尊感情測定尺度

この尺度は、Rosenberg が作成した Self-Esteem Scale 10項目を、山本・松井・山成（1982）が邦訳したものである。10項目の設問に対して、「あてはまる」（5点）から「あてはまらない」（1点）までの5段階で評定させた。この得点が高いことは、自尊感情が高いことを示す。

3) 社会的適応測定尺度

この尺度は、Y-G性格検査から社会的適応を測定する項目を抽出した30項目から構成されている。この30項目は、思考や行動の客観性、協調性、攻撃性等の内容から構成されている。各設問項目に対して、「肯定」（5点）から「否定」（1点）までの5段階で評定させた。この得点が高いことは、社会的に適応していることを示す。

4) デモグラフィック項目

調査対象者の性別、出身県、学年度について記入させた。

3. 調査の実施方法*

琉大、冲国大において、調査は心理学の専門科目と教養の時間において、それぞれ20分程度の時間を使用して各クラスごとに集団で実施した。調査用紙は、調査終了後にその場で回収した。

* 調査の実施にあたっては、1998年3月に琉球大学を卒業した吉田牧子氏の協力を得た。記して謝意を表す。

4. 調査期間

調査は、1997年11月下旬から12月上旬の間に行われた。

Ⅲ 結果と考察

1. 出身及び性による社会・文化的認知の比較

本研究で使用されている社会・文化的認知測定尺度は、「伝統的文化志向」の因子、「地域的互惠」の因子、「地域的愛着」の因子と命名された3因子で構成されている。換言すれば、本研究で挙げられている社会・文化的認知の内容は、これら3因子を含んだ限定されたものである。さて、大学生は自分の出身県の社会や文化に関して、どのような認知をしているのだろうか。図1は、沖縄県内出身学生と県外出身学生の社会・文化的認知得点を示したものである。図1における得点は、3因子の得点を合計したものである。出身(2)と性(2)の要因で分散分析を行った結果、出身の要因で有意差が認められた($F(1/249)=160.4, p<.001$)。しかし、有意な性差や交互作用は認められなかった。下位検定の結果などからして、すなわち、沖縄県内出身学生は県外学生に比べ、男女とも社会・文化的認

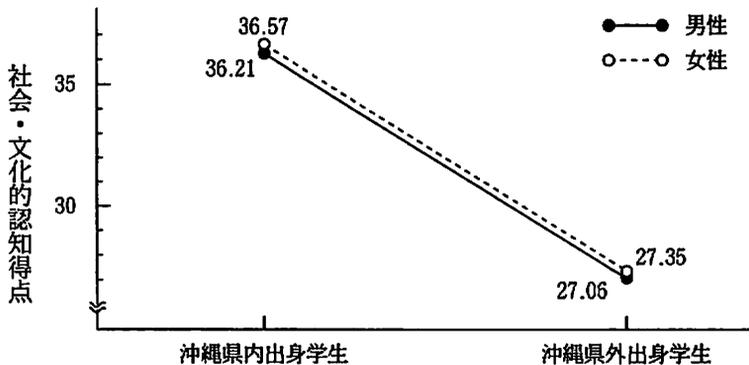


図1. 出身及び性による社会・文化的認知の比較

知得点が有意に高い。

次に各因子について、同様な分散分析を行ったところ、「伝統的文化志向」と「地域的互惠」の2因子において、出身の要因で有意差 ($p<.001$) が認められ、「地域的愛着」の要因では有意差の傾向が認められた ($p<.10$)。すなわち、3因子において県内出身学生は県外出身学生に比べ、社会・文化的認知得点が高い。なお、各因子において有意な性差や交互作用は認められなかった。

以上のような結果から、沖縄県内出身学生は県外出身学生に比べ、自分の出身県の社会や文化の諸相をより肯定的に認知していることが分かる。すなわち、県内出身学生は県外出身学生に比べ、出身県の人々や文化に関して「伝統的文化志向」や「地域的互惠」がより濃厚に存在していると認知している。また、県内出身学生自身が地元の県に関して「地域的愛着」をより強く抱いていることを示している。

NHK放送文化研究所(1997)の「全国県民意識調査」によると、沖縄県民は郷土への愛着が非常に強く、さらに、「土地のことは残したい」という肯定的回答率も85.3%に達し全国1位を示している。また、沖縄地域科学研究所(1985)によると、沖縄の県内外において沖縄の伝統芸能の保存、継承活動が非常に活発な状況にあり、このような活動は他県には例を見ないと述べられている。このような文献的指摘から、本研究の結果は了解できるであろう。

2. 社会・文化的認知と出身による自尊感情の比較

図2は、各出身学生ごとに社会・文化的認知得点の平均値で高群と低群とに分け、2群の自尊感情得点を示したものである。認知の要因(2)と出身の要因(2)で分散分析を行った結果、認知の要因で有意差が認められた ($F(1/250)=6.62, p<.05$)。しかし、有意な出身の要因差や交互作用は認められなかった。そこで、図2において県内学生と県外学生を込みにしてみた場合、認知高群は低群に比べ、自尊感情得点が有意に高く ($p<.05$)、またそれぞれの出身学生ごとでみると、両方で有意差の傾向

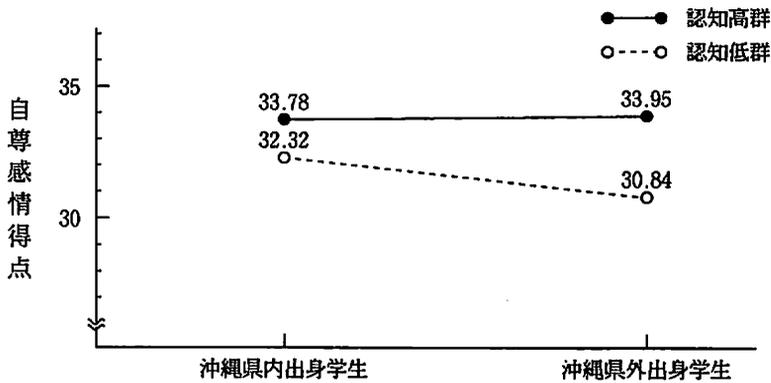


図2. 社会・文化的認知と出身による自尊感情の比較

($p < .10$) が認められた。

この結果に関して、当初、尺度の設問の表現法を工夫することによって、各調査対象者に内集団と外集団の差異の意識が喚起されることを期待し、Hogg & Abrams (1988) の社会的アイデンティティ理論に従って、社会・文化的認知の高群は低群に比べ肯定的な社会的アイデンティティを生起し自尊感情も高まるだろうと予測していた。図2の結果は、当初の予測を支持し、また、課題2) の仮説を部分的に支持するものである。

また、沖縄県民では「沖縄県人だという気持ちを持っている」という人や「沖縄県の人びとのももの考え方には、他県の人びとは違った特徴がある」と答える人が全国一多いと言われる (NHK放送文化研究所, 1997)。この点からすると、沖縄県民は他県民に比べ、出身県に関する何らかの想起刺激 (本研究では尺度の設問における表現法の工夫) によって出身県を自己カテゴリー化による内集団として、より意識化することが予測された。そして、出身県を内集団としてより強く意識すると、社会的比較の心理メカニズムが生じ、自文化への肯定的アイデンティティが高揚し自尊感情も高まると解される (Myers, 1993)。このような点からすると、県内出身学生は県外出身学生に比べ、自尊感情が高まることが予想された。しかし

ながら、図2の結果が示すようにこの予想は支持されなかった。その原因として、まず、県外出身学生に比べ県内出身学生の方に、筆者らが当初予測していたようなより強い自己カテゴリー化による内集団意識が生じなかったという点が考えられる。あるいは、尺度の内容や表現法に不備があったのではないかと考えられる。

3. 社会・文化的認知と自尊感情による社会的適応の比較

社会・文化的認知、自尊感情、社会的適応の3変数はどうのような関係になっているのだろうか。県内出身学生と県外出身学生を込みにして、社会・文化的認知得点と自尊感情得点のそれぞれの平均値とともに高群と低群とに分け、それぞれの群ごとに社会的適応得点を示した結果が図3である。認知の要因 ($F(1/224)=4.30, p<.05$) と自尊感情の要因 ($F(1/224)=10.59, p<.01$) でそれぞれ有意差が認められた。また、有意な交互作用も認められた ($F(1/224)=5.42, p<.05$)。すなわち、認知高群は低群に比べ社会的適応得点が高く、また自尊感情高群は低群に比べ社会的適応得点が高い。そして、自尊感情要因が社会的適応へ及ぼす影響は、認知低群に比べ

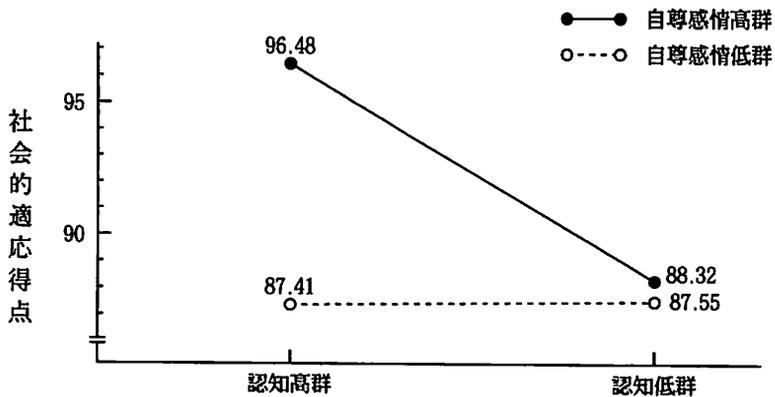


図3. 社会・文化的認知と自尊感情による社会的適応の比較

高群において大きいことが分かる。出身県に関する社会・文化的認知がより肯定的であり、さらに自尊感情もより高い者は社会的適応もより良好であることが言える。この結果は、本研究の課題2)の仮説を部分的に支持するものである。

次に図3で分類された4群に、県内出身学生と県外出身学生がどのような割合で出現するかをまとめ示したのが表2である。

表2. 社会・文化的認知と自尊感情による4群における出身別の出現率

出身県別	認H自H群	HL群	LH群	LL群	合計
県内 人数 (%)	62 (41.3)	56 (37.3)	13 (8.7)	19 (12.7)	150 (100.0)
県外 人数 (%)	11 (14.1)	5 (6.4)	25 (32.1)	37 (47.4)	78 (100.0)

表2において、出身県別の変数と群別の変数との間には有意な関連性が認められる ($\chi^2(3)=72.32, p<.001$)。すなわち、県内出身学生は認知得点と自尊感情得点がともに高い群(HH群)への出現率が高く、逆に県外出身学生は認知得点と自尊感情得点がともに低い群(LL群)への出現率が高い。そこで、図3と表2とを関連させて考察すると、県内出身学生は県外出身学生に比べ、社会的適応がより良好であることが推察される。

4. パス解析による分析と考察

ここでは、本研究の課題2)の仮説を検証する一つの分析法として、因果関係的に図4の要因連関モデルを作成する。つまり、性および出身というデモグラフィック要因が社会・文化的認知に影響を及ぼし、その認知とデモグラフィック要因が、自尊感情を規定する。そして、最終的に、社会的適応はデモグラフィック要因、社会・文化的認知および自尊感情によって説明される。

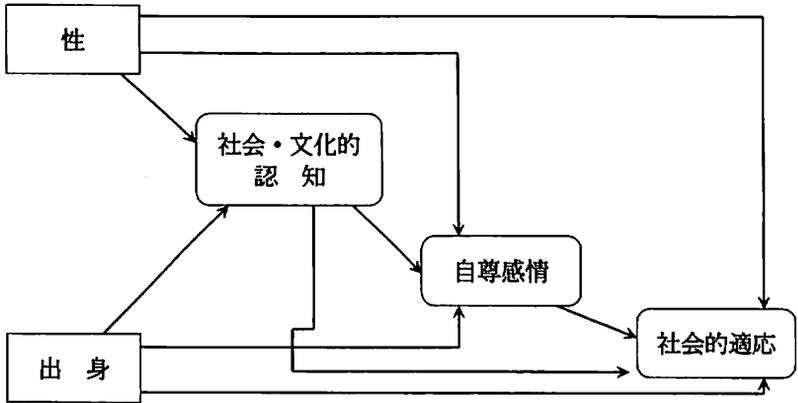


図4. デモグラフィック要因から社会的適応までの要因連関モデル

図4のモデルにおける因果関係をパス解析によって検討する。モデルを検討するため重回帰分析変数増加法を3段階により行った。なお、性(男=-1, 女=1)および出身(沖縄県内出身=-1, 沖縄県外出身=1)はダミー変数として分析した。また、出身と社会・文化的認知得点間に強い相関がみられ($r = -.626$)、多重共線性の問題を避けるため、次の自尊感情と社会的適応を基準変数とする分析において、両変数(出身及び社会・文化的認知)が説明変数として投入される際には出身の変数を除外した。図5はパス解析の結果である。矢印の数値は標準偏回帰係数を示す。なお、図5には上述のとおり、出身から自尊感情及び社会的適応へのパスは設定されていない。

社会・文化的認知得点($R^2 = .393, p < .001$)に有意に影響を及ぼしているのは、出身であり、沖縄県内出身者は、県外出身者に比してより社会・文化的認知得点が高く、自分の社会や文化に肯定的に認知していることが示された($\beta = -.626, p < .01$)。次いで、自尊感情得点($R^2 = .045, p < .01$)に有意に影響を及ぼしているのは、社会・文化的認知変数であり、社会・文化的認知得点が高い人ほど自尊感情得点が高いことが示された($\beta = .195, p < .01$)。これは、自分の社会や文化を肯定的に認知している人ほ

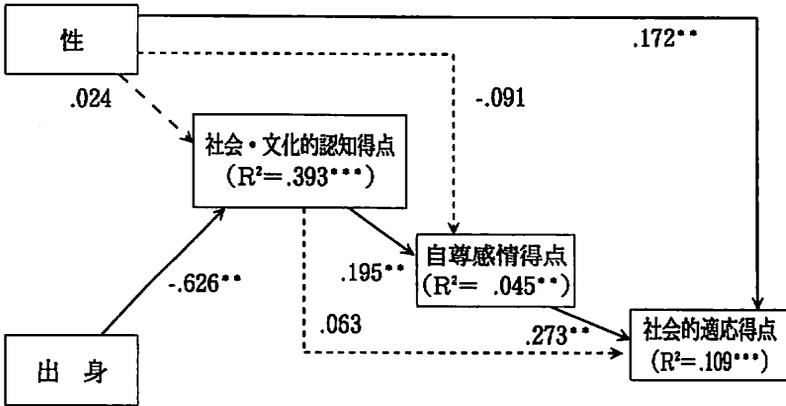


図5. デモグラフィック要因から社会的適応までのパス・ダイアグラム

ど自尊感情が高いという仮説を支持する結果である。しかし、説明率が4.5%と低く、性と社会・文化的認知の変数以外にも自尊感情を規定する変数が存在することが示唆された。そして、社会的適応得点 ($R^2 = .109, p < .001$) に有意に影響を及ぼしているのは、性と自尊感情の変数であり、女性は男性より社会的適応得点が高く ($\beta = .172, p < .01$)、また自尊感情得点が高い人ほど社会的適応得点が高い ($\beta = .273, p < .01$) ことが示された。この結果も自尊感情が高い人ほど社会的に良好な適応をしているという仮説を支持するものである。

以上の結果から、沖縄県出身者であるほど、自分の社会や文化に肯定的に認知しており、自分の社会や文化に肯定的に認知している者ほど自尊感情が高く、自尊感情が高い人ほど社会的に良好な適応をしているという因果関係の説明が可能である。

抄 録

本研究は、大学生の社会・文化的認知と自尊感情及び社会的適応との関係を明らかにすることを主目的としている。沖縄県内出身学生と沖縄県外

出身学生を対象に、社会・文化的認知測定尺度、自尊感情測定尺度、社会的適応測定尺度が実施された。これらの尺度の実施結果に基づいて、次のような成果が導出された。1) 沖縄県出身学生は沖縄県外出身学生に比べ、地元出身県に関する社会・文化的認知がより肯定的であった。しかし、自尊感情に関しては両出身学生群間に有意差は認められなかった。社会的適応に関して、沖縄県内出身学生は県外出身学生に比べ、より好ましい社会的適応をしていることが間接的に示唆された。2) 社会的アイデンティティ理論に依拠して、大学生が自己カテゴリー化した自分の出身県に関する社会・文化的認知がより肯定的である者ほど、自尊感情がより高く、また自尊感情がより高い者は社会的適応がより良好であろうという仮説を検証した結果、本仮説は概ね実証された。

引用文献

- Deaux, K. 1996 Social Identification. In E. T. Higgins, & A. W. Kruglanski (Eds.), *Social psychology: handbook of basic principles*. New York: The Guilford Press. pp. 777-798.
- 江溯一公 1979 文化学習、異文化間コミュニケーション 星野命(編) 人間探求の社会心理学4:人間と文化 朝倉書房
- Hogg, M. A., & Abrams, D. 1988 *Social identifications: a social psychology of intergroup relations and group processes*. (M.A.ホッグ・D.アブラムス 吉森護・野村泰代(訳) 1995 社会的アイデンティティ理論 北大路書房)
- Hogg, M. A. 1992 *The social psychology of group cohesiveness: from attraction to social identity*. (M.A.ホッグ 廣田君美・藤澤等(訳) 1994 集団凝集性の社会心理学 北大路書房)
- 星野命 1979 文化の中の人間一序にかえて 星野命(編) 人間探求の社会心理学4:人間と文化 朝倉書房
- 石川栄吉 1978 文化人類学の課題と方法 石川栄吉(編) 現代文化人

大学生の社会・文化的認知と社会的適応との関係に関する研究 (中村・玉木)

類学 弘文堂

- 磯崎三喜年 1994 児童・生徒の自己評価維持規制の発達の変化と抑うつとの関連について 心理学研究, 65, 130-137.
- 片山美由紀 1996 否定的内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連 心理学研究, 67, 351-358.
- Myers, D. G. 1993 *Social psychology*. New York: McGraw-hill, INC.
- 中村完・田中寛二 1994 異文化間の社会・文化的認知及び行動に関する比較研究(1) - 沖縄県出身学生と県外出身学生の比較 - 日本心理学会第58回大会発表論文集, 134.
- NHK放送文化研究所 1997 現代の県民気質 - 全国県民意識調査 日本放送出版協会
- NHK放送世論調査所 1979 日本人の県民性 - NHK全国県民意識調査 日本放送出版協会
- 沖縄地域科学研究所 1985 沖縄の県民像 - ウチナンチュとは何か - ひるぎ社
- 菅沼真樹 1997 老年期の自己開示と自尊感情 教育心理学研究, 45, 378-387.
- Tajfel, H. 1982 Social psychology of intergroup relations. *Annual Review of Psychology*, 33, 1-39.
- 田中靖政 1986 主体文化の社会心理学 星野命(編) 社会心理学の交叉路 北樹出版
- Turner, J. C. 1987 *Rediscovering the social group: a self-category theory*.
(J.C.ターナー 蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美(訳)
1995 社会集団の再発見 - 自己カテゴリー化理論 誠信書房)
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.